

「パリの彫像」

花の都パリ。

ガール・デュ・オーステルリッツ駅前広場に、

見馴れぬ彫像が立ってござる。

ワインを片手に零落姿の御婦人が、

台上がって酔いどれポルカ。

いいぞ、ブラボー！ 世間なんて糞くらえだ！

俺も文無しジャポネの辛い身だ。

上がっていっしょに踊りたいが、

あいにくノミの心臓、そんな度胸はこれっぽちもない。

ふふふ、このお坊ちゃん、

和製ランボーを気取って来たんだと！

ランボーならとっくにこのマダムと踊ってらあ。

おっと、俺に投げキッス。そこまでされても…

こいつ、下向いて行っちゃまったぜ！

※DUABWIR・A※DUABWIR・A※NON!

「マルドロール」

おさなこの頬を切り裂き泣きわめく、

その顔見てはいたわりて、

汝（な）と我のきずな見しという彼の非人、

マルドロールの悍しさに、

その闇厭いて、ひとりだに、

吾（わ）を知らざらん外つ国へと、

はるけくも斯く来たりしものぞ。

さるを…

「見て！ あの非人！」

それ誰さし忌むや、云いおるや。

われ汝らを知らず、汝らも我を知らざるべし。

などさは云うぞ!?

非人の所業その返しとて、

な裂きそ我魂、さ言葉のナイフもて。

愛の切り裂き受けたとて、

泣いて応うべき我ならなくに…



## 「緑の館」

僕を連れて行って欲しい、やさしい風の娘たちよ。  
君達もつとも朗らかな声で笑うという、  
あの陽光（ひかり）あふれる緑の館へ。  
そこに人はいない。

愚かで傲慢な白豚どももいない。  
そいつらの醜く、性質の悪いことと云つたら  
まるでお話にならなくて、

イエローの僕をまったく人間あつかいしないんだ。  
ただ爪はじきされ、差別されるだけの為に

僕はいま豚の国に居る。許せないのは…  
僕がここに來てしまったということ、

豚の豚たるを知らず、  
剩え僕は此奴らに憧れてさえいたんだ。

此奴らの国を訪れることを生き甲斐とし、  
もって未だ灰色の人生の、しかし未来における

光明とさえしていた。

この無明、この愚かさを、いったい何と語れよう！  
いますべてを知って、失って、

ただ眩暈がするばかり…

どこへ行っても、どこで生きても、  
まわりの連中が僕にはみな豚に見える。

黄色豚、黒豚、白豚、etc 豚。

だからもう、ここから逃れてあそこへ行こうなんて、  
考えるもせんなきことだ。人間がいる以上。

どこへ行っても、どこで生きても、僕は異邦人。  
たぶん僕は、異星から來たか、  
でなければ魔界の者だ。

生まれてこのかた人を一度も好いたことがない。  
そのことゆえに僕は自分への理解ができる。  
ただ他人の眼には僕は馬鹿と写るだろう。

だから、さあもういいだろう、やさしい風の娘達よ。  
僕を拉致して、連れて行って欲しい。

人のいない（絶対に！）、あの緑の館へ。

何と云つても僕はそこで

（白豚のリーマの目を盗んで）

アリどもを殺してやりたいのだから…



「カルメン」

夜のサクラメンテ。

街灯もない真つ暗な坂道を、

でも期待に胸ふくらませながら、せつせと上つて行く。  
女を買いに行く気分だ。

だつて見えて来たあの灯りには、あの洞窟には、  
きつと：

中に入れば畳十畳ほどのフロアで、

バイラオーラがバリージョを売りつけて来る。

壁に居並んだドイツ人観光客ならともかく、

あいにくこちとら金に縁のない、

ハポネス・ボヘミアンだ。皿洗いのタワシだ。

ノー・グラリーシヤスの一言に、

フンと鼻を鳴らしてバイラオーラは行つちまった。

おなじ血と慕つて来てみたが、地の果て住まう虐げら

れたロマなどと、そんな感じじゃ全くないね。金がす

べての、ほんにどこも味気ない世の中だ。

「オレオーレ」トケが鳴り、ハレオがかかる。

年増のバイラオーラたちが輪になつて踊りだした。

バルマの拍子にも、カンテの歌声にも、  
今はもう心は浮き立たない。

貧乏人の来る所じゃなかった、などと、

またぞろ自分のまわりに壁を造りだす俺だ。

きつとみつともなく一人目立っているに違いない。

しかしこの時バイラオーラたちの輪が割れて、

中から赤いドレスを着た雌豹が：

いきなり俺に咬みついた！

「どう、色男、私をモノにできる？」

とばかり俺を睨みつけ、凄いだレスカットの白い背、

突きつけ踊るカルメン見れば、

俺の心はもうすっかりドン・ホセだ。

激しくサパテアードを踏んでは俺の、男、を呼び覚ま

し、身を、頭上高く上げたブラッソをくねらせては、

ロマの哀しさを、同じ血だということを、俺に示して

みせる。気に入った。踊りたい。この女と踊りたい。

どこまでもいっしょに：狂つてみたい。

「へい、カルメン：」

待てよ、金はあつたつけ：？

× × × × × × × × × × × × × × × × × × × ×

## 「コブレンツ古城」

松明の炎に映されて、

夜の城壁を巨人の影が巡っている。

踏みつぶされては大変だ。

俺は辺りのものかげに身を隠す。

やがてゴヤの絵にあるような凄惨な奴がやって来た。

腹に響く野太い声で、「寂しいよう、哀しいよう」と、

なんとも遣る瀬なげにひとつ事を連呼している。

姿も恐ろしいがその声がたまらない。

俺は両耳を手で覆って聞かまいとする。

巨人が目の前を通って城の裏側へと消えた時、

俺はもはや堪えきれず、城の外壁をよじ登って表へと

飛び下りた。巨人の声も姿も、なぜか、俺を見るよう

で、だから瞬時も堪え切れず、俺は脱出したのだ。

地面にうずくまって様子をうかがっていると、今度は

壁の内側から城兵とおぼしき声が聞こえて来た。

「卑怯者はどこへ行った?」「逃げた!」「ひっ捕まえ

ろ!」などと口々に叫びだす。一人、また一人と外壁

に上ってはこちらに飛び降りて来るようだ。

彼らは「必然」という名の城兵たちだった。

巨人以上に俺は彼らが恐ろしく、

表現不能の恐怖にかられて、

脱兎のごとく草地の上を駆けだした。

逃げる、逃げる、やみくもにただ逃げる!

しかしそんな俺を揶揄うように、キツネかイタチのよ

うな小動物が、前に横に並走するのが奇妙だった。

息が続かず、現れた窪地の中にもんどりうって倒れ込

む。荒い息を押し殺して潜んでいると、いくばくもな

く城兵たちがやって来た。

「やつは何処だ?」「此処らにいろぞ」「捕まえて引つ

立てろ!」「巨人と対峙させるんだ」

などと真つ平御免なことを喚ぎだす。

冗談じゃない。そんな恐ろしいこと、云わないでくれ

!…しかし彼らはすぐに俺をみつけるだろう。俺は固

く目をつぶり、幼児のように、「必然」の執行がなされ

るのを、ただただ拒みつづけていた…

汗びっしょりで目を覚ます。しばらく呆然自失。

ここがどこだか判らない。

シーンとした静寂に、身で感じる石の重圧に、

コブレンツ古城内のユースホステルにいることを思い

出した。時刻は深夜、一人しかいない同室のホステラ

ーが、寝息もたてずに眠り込んでいる。

夢の中で俺はいつたい何を見たのだろうか？

城で獄死した囚人たちの、その集団化した姿を巨人として、また城の攻防で戦死した兵士たちの、その怨念を見たのだろうか？

急に寝込んでいる男がうめきだした。俺と同じ悪夢でも見ているのだろうか？

「HERE THEY COME!」としきりに寝言を云っている。来るって、誰が？

…と、部屋の外、長い廊下の向うから、ガシャリガシャリとなにやら金属の音をたてて、複数の人間たちが近付いてくる様子。彼らは…？

やがてドアの前に立ち止り、ドアが開いて…

表の、城前に放し飼いにされた大型のシェパードが、何かを怪しんで猛烈に吠えだした…。

また目を覚ました。

こんどは…？ここは…病院の中だ。巨大な某大学付属病院の一室、四人部屋だ。時刻は夢同様真夜中。俺は入院していたんだっけ…。しかし驚いた。夢を二重、三重に見ていたのか。若い頃ヨーロッパを二年近くさすらった折りの、コブレンツ古城で実際に見た巨人と城兵の悪夢、それを四十有余年後のいま、また同じ

ものを見るとは…夢は時空を超えるところが、実に奇怪至極なことだ。しかしなぜ、今…？

変わらないからだ。

そしておそらくもう、時間がないからだ。

夢解きはとづくに出来ていた。

あの巨人は俺で、城兵たちも…これもやはり俺自身だ。偽我と真我、なさない俺と超越した俺…。

巨人は巨大化した自縛の象徴だ。もう長いこと俺は俺を孤独と臆病の檻の中に閉じ込めて来た。もう慣れっこになつていたし、そのほうが楽だった。

城兵らは、あの後きつと巨人を巷に放したのだ。貴様が来ないのなら巨人にあとを追わせてやるとばかり、アレを放ち、俺に憑かせたのだ。俺には見えないが、他人には何某か、その巨人を感じられるようにして。考えてもみてくれ。あの図体だぜ。

めだたないわけがなからう？

世間が俺を嘲るまいことか、その訳がようやくわかった。しょぼくれた、臆病なジャイアントなんて…笑止、笑止。

城兵たちはいまだドアを開けて告げた。「お前は死病だ

。「もういくばくもない」と。

何ステージだか、けっこうな胆管ガンを告げられて、俺はいまここにいる。

明日がガンの手術で、ひよつとしたらひよつとするかも…。

さあ、どうしよう?…。そうだ…

「おい、ちよつと待ってくれ」と俺は帰ろうとする城兵たちを呼び止めた。

「俺は行く。あんたらといっしょに巨人のもとへ。対決するから連れてってくれ」。

城兵たちは顔を見合わせた後、おうように俺にうなずいて、「ついて来い」と一言。

しかし手で首を切る仕草をして「こんど逃げたら、これだぞ」とばかり、腰の剣をつまんで鞘にもどしてみせた。うなされてる同室のホステラーを残して、俺は城兵たちの後をついて行った。「いい夢に変わるよ」と一言を云って。

表でシェパードの吠え声がしない。ということはドアを閉めた途端に城は中世に戻ったということ。さらにということとは、表には…

孤